
金魚

鈴木イチ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金魚

【Nコード】

N1658F

【作者名】

鈴木イチ

【あらすじ】

美しい肉食魚である『彼女』の餌として買ってきた、幼い金魚のデイーと接しているうちに、冬来の胸にはいつしか、正体不明の焦燥感が宿るようになっていた。

餌として買ってきたつもりだった。当初は。

名を付けていない『彼女』の、餌として。

なぜか今は、その餌に餌を与えて生かしてしまっている。

（ヤキが回ったもんだな、俺も）

そう嘆息して、微笑した。説明の付けられない自分の行動は、正体不明の凶暴な焦燥感にあった。

今は痩せっぼっちの幼い家畜が、丸々太って見るからに食べ頃になるまでの我慢だと思って、曖昧模糊な衝動を意識の片隅に追いやり、日々を邁進している。

こいつが真っ赤な血を振り撒いて、内臓を撒き散らしながらガツガツと食われてしまえば、胸の内に巢食う暗い不安も消滅するに違いない。そう無理矢理決め付けて、冬来は騒ぎ始めた神経を強引に抑圧した。

「腹減ったあー。プリン食べたい、プリン！」

「うつせーチビ。静かにしろ」

冬来がピシリと一喝すると、目に痛い紅い衣を纏った家畜は、ううつ、と意味の無い音を漏らして沈黙した。しかし不満そうに頬を膨らませており、不機嫌オーラを周囲にばら撒くことだけは忘れていない。生意気なヤツだ。

「そんな事言っていいのかよー。早く俺太らせないと賞味期限きちまうだろーが。そんなことになったら勿体無いっしょ？俺も不幸だし」

「家畜が人間に意見するなんざ、世も末だな」

新世紀がはじまったばかりなのに、冬来はそう思わずにはいられなかった。それにしてもよく回る口である。買ってきた当時の姿からは想像できないほどに。

少々うんざりしながら、冬来は買ってきたばかりのプリンを家畜に向かつて放り投げた。

「それ食ったら、また寝ちまえ。起きてると煩くてかなわねえ」

「ほーい」

早速包みを開けたヤツは、もぐもぐと忙しそうに口を動かしながら返事をする。出来の悪い弟でも出来た気分だった。

冬来は昔から生き物を沢山飼っている。公言はしていないものの、実は動物好きだったのだ。馬にしる犬にしる猫にしる、血統書付きの上等なものばかりで、それは魚に至っても例外ではなかった。龍の化身としても名高い、アジアアロワナ。その中でも一際高貴な印象を受ける金龍と言う、一目見たら忘れられそうにない程の美しい姿が、一室の壁面を打ち抜いて改築された大型水槽の中に在る。最近、店で見かけて即買いしてしまった代物なので、まだ名は付いていない。しかし雌ということもあり、冬来はただ単に『彼女』と呼んでいた。

肉食魚である『彼女』のため、毎日大量の小魚が必要になる。アロワナ用に配合されたドライフードでも事足りるのだが、しかし冬来は生きた小魚が『彼女』の水槽に投入され、断末魔の悲鳴を発しながら必死の逃亡の末に活餌にされる様子を観察するのを好んだ。餌が見目美しい金魚だったりすると非の打ち所が無い程にゾクゾクする。友人に言わせると「とんだ悪趣味」らしいのだが、好きなものは仕方がない。

そうやって買い占められた金魚の中に、デューは居た。

冬来宅に送り届けられた金魚は、一度『彼女』とは別の大きなプールに入れられる。そこで餌になるまでの死の順番を待つわけのだが、ある日冬来が『彼女』の餌を餞別するために金魚用のプールを訪れたところ、一匹だけプカプカと浮いている赤い塊があった。

なぜ死骸が放置されているのかと腹立だしくなり、すぐにその金魚を捨てようとした。しかし、水から出して暫くすると、驚く事とその金魚はパチリと目を開けたのだった。

「なんだよー。せつかく気持ちよく昼寝してんのに、邪魔すんなよなあ。寝る子は育つんだぜ？　もし今の邪魔で俺の味が落ちたら、あんた責任とつてくれんのかよ」

「……ああ？」

肌に纏っていたひらひらの紅い布は濡れそぼり、金糸に近い髪の毛もこごなつて大量の雫を床に落としている。しかし家畜にしては随分と整った顔立ちだ。本来金魚は観賞魚であるから、姿かたちが美しいのは当然かも知れないが、こいつは他の金魚より群を抜いていると思つた。しかし四肢は痩せ細っており、家畜としての食指はとても沸かない。

「死んでたんじゃねえのか、貴様」

「見れば解るでしょ、ちゃんと生きてるよー。ビョーキもないし、もうすぐ食べ頃、ピチピチの可愛い金魚ちゃんだっ」

えへん、と胸を張つて、家畜は人懐こく笑つた。

「その割には痩せすぎなんじゃねーの。喰われないならもつと太れ」
「わかつてるよそんなこと。俺は元々太れない体質なのっ。これでも頑張つてんだかねー！」

先刻までニコニコしていた表情を途端に崩し、今度はあからさまに不機嫌になつている。喜怒哀楽の激しいヤツだと思つた。

仕方が無いのでその日から、冬来はそいつをプールから連れ出し、餌として相応しく熟すまで特別に面倒を見てやることにした。

家畜は、ペットショップにいた頃は係の人間から「デイー」と呼ばれていたそうなので、自分もデイーと認識することにした。どうせ名を呼ぶ事など無く『彼女』の腹に直行だろうから、無駄な知識かも知れなかったけれど。

「ねね、冬来。もうそろそろ俺、食べ頃じゃない？」

デイーは、冬来と顔を合わせるたびに同じ質問をした。遂には一日に一回は決して欠かさない、恒例行事のようなものになっていた。
「さあな」

「なんだよ、その気の無い返事はっ。俺にとつちゃ餌になるのは一

世一代の晴れ舞台なんだぞ！ すっごく誇らしい事なんだぞ！ も
っと真剣に俺を見てっばっ」

なんとなく気が乗らなかつたので適当に流したら、ぎゃーぎゃー
と煩く付き纏われたので、仕方なく冬来は紅い服の襟足を鷲掴み、
人間の子供程度の大きさをしたデイーを簡易プールから摘み出した。
「どう？」

「どうつつわれても、昨日と大して変わってねーよ」

「そっかなあ。今日こそはと思ったんだけどなあ……」

しょぼん、と肩を落として、デイーは唇を突き出した。

「でも、ま。いっか。頑張ってもっと美味しい餌になる。こうやつ
て冬来とダべるのも面白いしさ。時期ももうちょっとだと思っし」
ふむふむ、と勝手に自己完結して落ち着いて、デイーは再度自ら
の決心を固めるように両の拳を握った。

「……」

確かに、初見よりは肌の色も唇の艶も健康的に色づいている。瘦
せすぎだった体型も標準に戻り、そろそろ『彼女』に与えても良い
頃かもしれない。

だが、デイーと接する時間が増えれば増えるだけ、冬来の心には
釈然としない蟠りみたいなものが大きくなっていった。少し前から
感じていた、違和感のような焦燥である。

「……なあ」

「なに」

大きなどんぐり眼を上目遣いにして、デイーは冬来を見上げた。

「お前は、餌になるってことがどんなことだか、解ってんのか？」
「？」

冬来の問いを、デイーは不思議そうに受信した。

「うん、解ってるよ。死ぬってことでしょ？」

「……だったら、なんで……？」

冬来はとても苦しそうな表情をしている。なぜ冬来がそんなに辛
そうなのか解らなくて、デイーはびよこんと首を傾げた。

「それが、どうかしたの？　いつも言ってると思うけど、俺たち肉食魚用の餌として育てられた金魚は、餌になるのを常に夢見てるんだよ。だってそのために生まれてきたんだし。少しでも美味しい餌になれるように、ご飯もらって、運動して、お昼寝して。美味しく食べてもらえるようにって、いつもそれだけを考えてるんだよ？」

「でも、食べられたら痛いだろうよ」

「そりゃあねー。食い千切られるわけだから。でも、痛みよりも幸せの方がおつきいよ。きつと、断然おつきい」

「そんなの……！」

納得いかない、とばかりに声を荒げた冬来に、デューは冷静に対応した。その落ち着きっぷりに、冬来はますます神経を逆撫でられてしまう。攻撃的な感情が先行し、語尾が乱暴になるのを止められない。

「食べられたら……死んだら、もう二度とプリンも食べられねーし、俺とも喋れなくなるし、そこで全てが終わるんだぜ？　そういう運命を不幸だとは思わねーのかよ」

「プリンは甘くて大好きだし、冬来も面白いから大好きだよ。でも、俺は餌としての本文をまっとうできない人生なんか、想像するのモヤだ。そんな不幸な出来事、ほかにはない」

デューの声音は竹を割ったようにきつぱりしていた。

駄目だ。これでは永久に平行線だ。人間と家畜の価値観は、これほどまでに異なったものなのだろうか。

冬来自身は、誰かに食われる事を夢見るなど、言語道断で勘弁だった。正常な神経ではないと思う。自分が殺されて身体が食われる想像なんて、1秒でも考えたくない。おぞましさに虫唾が走る。

「……俺は、」

俺は、一体何がしたいのだろうか。

数日前から如実になってきた、無視できない感情。とても自己中心的な、自己顕示欲の塊。

デューを、殺したくないと思ってしまった、自分。

（何故だ……？）

暇さえあれば寝ているけれど、声を掛けたり頬を擦ったりして起すと、眩しいばかりの満面の笑顔と、くるくると忙しく動く瞳で、煩いほどに屈託なく自分に話し掛けてくれるディー！。

ディー本人もこの生活に満足しているようだし、ずっとこのままでいられればいいと思っていた。

だけど、やっぱりディーは家畜で。

自分との生活よりも、『彼女』に食われることを強く望んでいて………だったら、………」

早く食われちまえばいいんだお前なんか、という台詞は、最後まで発される事は無かった。

「……早く、食われるようになるといいな」
「おー！」

嬉しそくに返答するディーを正面から見られなくなって、冬来はふいと視線をずらした。

ぼんやりと、脳裏の片隅に思惟が浮かぶ。

（他のヤツが食う位なら、俺が……）

その決意は、まだ俄然柔らかくて、定まらないものだったけれど、そういう選択肢が芽生えたことに、冬来は思いのほか満足して、そっと部屋から退出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1658f/>

金魚

2010年10月8日15時08分発行